

メッセージアウトライン ローマ 3：1～8「神の真実」

[1]「では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか」これはユダヤ人が他の民とは違う特権は何か。また、神の民のしるしとして受けている割礼の利益とは何か。それらは何もないのかという問いかけである。

[2]「それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなことばを」ゆだねられています」これはパウロが今まで語ってきたことと矛盾するように聞こえる。しかし彼が2章で語ってきたことは、神のさばきの前にあっては民族的、宗教的差別はないということであった。このことはユダヤ人が宗教的、歴史的に多くの特権と長所を持っているということとは別のことである。第一に彼らには神のことば(旧約聖書)がゆだねられている。その中心は、やがて来られるメシヤ、救い主に関する契約、約束、預言であり、それはユダヤ人の歴史を通してイエス・キリストにおいて実現した。しかし彼らはこの方を受け入れなかったのである。

[3]「では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるのでしょうか」

彼らが救い主イエス・キリストを拒んだことが神の真実を無に帰し、神の約束は無効となり、ユダヤ人の特権は失われてしまうのかとの疑問である。

[4]「絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです」

パウロはここで、人間の不安定さ不真実さと比べて神の真実の絶対性を強調する。4節後半ではその例として詩篇51篇4節(ギリヤ語70人訳)を引用している。

[5-7]「しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。……」

人間が偽りに満ち、不義であるおかげで、神の義、正しさが明らかにされたのであれば、その人間の不義に対して怒りを下すのはおかしいではないか。そんなことをすれば神がかえって不義な神になるではないかという疑問である。しかしこれは絶対者である神とそうでない人間の本質的な違いを忘れた「人間的な言い方」でありパウロは6節でそのことを強く否定する。神は人間の罪をさばき、怒りを下す正しい神であることに変わりはない。7節の問題提起も同じような人間的論理から出てきたものであり、人間の説得力ある論理も誤った結論を導き出すという実例である。

[8]「善を現すために、悪をしようではないか」

パウロは「人が義と認められるのは律法の行いによるのではなく信仰による」と主張していた。それをユダヤ人たちは律法など守らなくてもよい、我々が悪いことをするところに神の義が現れるからだ。だから悪をしようではないかとパウロのことばを誤解した。このような誤解をし、中傷する者たちは当然罪に定められるのである。

神の真実は変わることがない。私たちはこの決して変わることのない神の約束を信じ、信仰をもって従う者とならなければならない。